

明治史料館通信

1987. 1. 25 (季刊 年 4 回発行) Vol. 2 No.4 通巻第 8 号

江原素六とその周辺 (5)

積信社



徳川慶喜書 積信社篇額 (沼津市 野村康夫氏寄託)

明治九年(一八七六)三月(十一月ともいう)、江原素六は、製茶をアメリカへ直輸出するために積信社という会社を結成した(十一月二十一日付で県令宛に提出された結社の申合規則と茶葉直輸願では、結社名が「叢流社」となっている)。幕末の開港以来、茶の海外輸出は外国商人に独占されていたが、その中間搾取を排し日本人自らが貿易の主導権を握ろうという先駆的な意図をもつ会社であった。

社長江原以下、副社長江藤俊平(東沢田)・同長倉源佐久(西間門)・同依田治作(沼津)・幹事賛川五平(長沢)・同坂三郎(沼津)らが幹部であり、その他市河彦七(沼津)・仁王藤八(沼津)・相沢文太郎(伏見)・川口与五郎(鳥谷)・小沢理三郎(駒門新田)・原大平(大平)・梅田良三郎(下徳倉)・湯山半七郎(御宿)・増山源吉(松長)・長倉誠一郎(西間門)・江藤舒三郎(東沢田)らが主な社員であった。当初の社員は全二十七名であり、資本金は三千円だった。江原以外は、沼津とその周辺の豪商・豪農たちであった。

明治十年(一八七七)一月十六日付で設立願書を静岡県令大迫貞清に提出し、同年三月に創業した。四月には、

『静岡新聞』紙上に「静岡県管下第一大区七小区駿東郡沼津城内町 積信社製茶所」の名で開業広告を出した。そして五月二十七日には開業式を挙行し、その年受洗したばかりの江原は、聖書の一節を引用しながら、殖産興業と貿易伸張を高らかに謳った祝辞を述べた。そもそも、沼津周辺では、幕末ころから商品としての茶の栽培が開始され、積信社設立当時にはかなり広まっていたらしい。中でも沼津の豪商・千株堂主人坂三郎は、既に幕末期に茶園の開拓を始め、近江や山城から職工を招き、製茶法を学び、茶業の振興・普及につとめていた熱心家であり、積信社の結成も彼の力によるところが大きかったと思われる(彼は、社の開業に先立ち、江藤俊平とともに自ら内務省勸農局で再製法や荷造りの伝習を受けたという)。同じく沼津の豪商である油屋市河彦七も、明治六・七年ころには中沢田村に十余町歩の茶園を作り、盛んに製茶業を経営していた。

一方、明治維新後移住した旧幕臣土着士族たちも、藩や県の奨励もあり、愛鷹山麓で茶の栽培を始めていた。中でも東沢田村笹見窪に土着した士族たちは、江原素六をリーダーに仰ぎ、牧

畜や製茶に熱心に取り組んだ。
 このように、積信社は、豪商・豪農たちの経済活動と土族授産事業とが、江原を介して結びついたところに成立したのである。

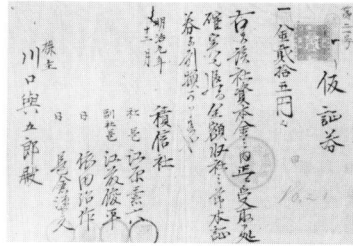
積信社は、各地の製茶家から茶を集め、それを再製・梱包して輸出したのであったが、アメリカでの販売は三井物産ニューヨーク支店に委託した。三井物産会社社長益田孝は、幕府陸軍士官のときからの江原の知友であり、さらにニューヨーク総領事富田鉄之助も旧知の間柄であったため、種々便宜をはかってもらうことができた。
 当初は、さほどの利益も上がらないかわりに、損失も少なかった。明治十二年（一八七九）には、アメリカの需要が増大したため、製



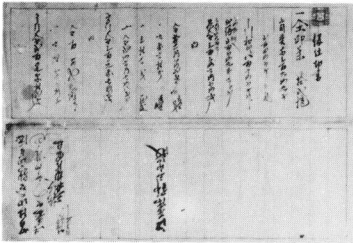
▶江原自身がデザインした積信社製茶のレッテル（下書き）

造が間に合わないほどの好況となった。その年九月には、はじめての製茶共進会が横浜で開かれたが、積信社は三等を受賞した。また江原も、同年八月に三島を訪れたアメリカ大統領グラントを積信社に案内したり、演説結社参同社で製茶輸出に関する演説を行った（三月）といった具合に、盛んに活動している。

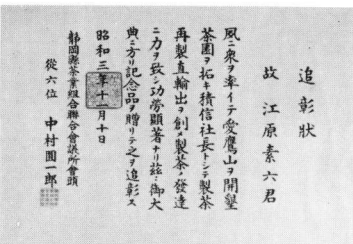
明治十四年（一八八一）二、三月にかけて開催された山梨・静岡・三重・愛知の四県連合共進会では二等賞、同年三月の第二回内国勸業博覧会では二等有功賞、十五年（一八八二）十一月の四県連合共進会では二等賞をもらうなど、その後も積信社は共進会や博覧会に積極的に出品している。また、十



積信社の仮証券（川口泰雄氏所蔵）



三井物産からの仕切書（江藤昭二氏所蔵）



静岡県茶業組合からの追彰状

四年六月には、社員樋口正信（東沢田土着の旧幕臣）が石川県に出張し、小松や大聖寺で再製茶製造所の建設を指導したり、同年九月には富士郡大宮町でも再製茶会社を設立しようと池谷佐平・高瀬牧太郎・寺田長太郎らが積信社を視察に訪れたりしている。

明治十四年三月には、坂三郎・依田治作・江藤舒三郎・長倉誠一郎が、駿東郡長江原素六に対して、「茶会談之議」を捧呈し、駿東郡中の茶業家を沼津に集め、情報や意見の交換をする場を設けてはどうかと提案した。江原は、郡長として行政の面からも製茶業を指導する立場にあった。また同年七月には、東京から井上馨の息子勝之助が来沼し、積信社を視察してい

るが、これは江原が中央政財界への太いパイプを作ろうとしたのかもしれない。
 ところが、一時の好況に気を良くし、粗製濫造の製品までを大量に輸出した結果、それが売れずに返品されるといった状況が続ぎ、明治十三年以降は赤字が累積していった。十四年八月にはより一層の事業拡大のための新たな株主を募集し、新聞紙上に「製茶会社設立広告」を出したが、退勢は挽回できなかった。そして遂に十六年（一八八三）、五万円という膨大な負債をかかえ積信社は解散した。

しかし、坂三郎らの尽力によりその後も沼津の製茶業は発展を続けていった。積信社の失敗はその後の発展の礎となったのである。

〔参考〕『明治初期静岡県史料』第二巻・静岡県茶業史・『日本茶輸出百年史』・『岳陽名士伝』・『静岡県德行録』・『江原素六先生伝』・『沼津史談』
 34・『静岡新聞』・『函右日報』・『沼津新聞』

シリーズ
沼津兵学校とその人材
御貸人

沼津兵学校の名声は全国に響きわたり、諸藩の中には兵学校の人材を自藩に招き、兵制や教育改革の指導を仰ごうとする藩もあつた。

明治二年（一八六九）八月には、土佐藩から、三等教授方永持明徳を借り受けたという依頼があつたが、これは断つたらしい。

明治三年（一八七〇）五月には、阿波徳島藩主蜂須賀茂韶が自ら勝海舟に依頼し、陸軍惣督になるべき人物と操練教授を担当してくれる人物を借り受けたいと申し込んできた。その結果、石井至凝・原胤則・阿久沢新吉（以上兵学校卒業生）・小山弥吉・伊熊醇一郎の五名が徳島行の候補者に挙げられた。五名全員が実際に派遣されたのか



石井至凝

どうかは不明だが、石井は徳島に赴任したといわれている。また、附属小学校素読教授方山田楽も同年十一月に徳島に赴任し、同藩の学制改革を推進した。その時制定された「徳島藩小学校規則」は、「徳川家兵学校附属小学校掟書」をもとにしたらしい。

同三年五月には、鳥取藩からの人材派遣依頼により、中山謙吉・瀬本武揚・房間庸次郎の三名が選抜されている。

さらに、同年閏十月には、薩摩藩からの招きにより、沼津兵学校設立の立役者阿部潜（少参事・軍事掛）が自ら鹿児島に赴き、蓮池新十郎（附属小頭取）・蓮池源吾・堀田徳次郎（兵学校卒業生）・吹田鯛六（同上）・名村五八郎（静岡学問所教授）・佐久間貞一・小林弥三郎らがそれに同行した。彼らの援助により、明治四年（一八七二）一月、



武田成章

同藩は、本学校・小学校・郷校を新設し、普通教育制度の基礎を築いた。兵制の方も、幕府のフランス式を取り入れた。

その他、明治四年一月には徳島藩が、沼津兵学校運営の首脳である藤沢次謙（少参事・軍事掛）の借用を申し込んだほか、同年五月には柳河藩が英学者の派遣を依頼してきているが、これらはいずれも実現していない。

ところで、派遣を依頼されたのは、沼津兵学校の人材ばかりでなく、他の静岡藩の人材に対しても同様に声が掛かった。静岡学問所の教授中村正直は、弘前藩から招きを受けたが、自分の代りに宮崎立元と島田徳田郎を推薦している。函館の五校郭を築いたこと有名な兵学者・武田成章（斐三郎）は、明治元年（一八六八）十二月という早い時期に、信州の松代藩



沼間守一

に赴き、同藩に兵制士官学校を設立してその教頭になっている。また、新政府にあくまで反抗し、官軍と戦って敗れ、捕われの身となった後釈放され、静岡藩に引き取られたという、いわば前科持ちの人物ですら、優秀な者に対しては諸藩が争って招聘した。

後年自由民権運動の闘士として嚶鳴社を率いて活躍することになる沼間守一（慎次郎）は、幕府陸軍の歩兵奉行並として会津や庄内を転戦したが、官軍に捕えられ江戸に護送され、静岡藩邸に幽閉されていた。そして明治二年に放免された後、土佐藩の依頼により、同藩士に英学と練兵を教授した。

榎本武揚艦隊の脱走に参加したもと幕府陸軍の銃隊頭多賀上総介（三十郎・外記）は、箱館敗戦後鹿児島に招かれ、沼津兵学校から派遣された阿部潜らとともに同藩



小宮知淵

の改革に貢献したという。

また、黒楯組二〇〇名を率いて脱走し、大鳥圭介らとともに関東東北を転戦して箱館五稜郭で敗れたもと幕府陸軍の工兵頭並小菅知淵（辰之助）は、一時投獄された後釈放されて静岡藩に帰参し浜松に住したが、明治三年（一八七〇）十二月和歌山藩に招かれた。小菅には、沼津から筒井於兎吉（もと新砲兵差図役）が同行したほか、やはり箱館戦争に参加した関広右衛門（榎本政権の砲兵頭並）も和歌山に派遣されたという。ちなみに、小菅知淵は、日本陸軍工兵の草分けであり、後に陸軍参謀本部陸地測量部（現建設省国土地理院）の初代部長となった。

武田成章・沼間守一・小菅知淵などは、本来ならば静岡藩にとどまって沼津兵学校の教授になっていくべき人物である（現に沼間守一は、幽閉中に兵学校教授方手伝山田昌邦から教授就任の勧誘をうけたという）。しかし、時代の流れは、静岡藩による人材独占を許さなかつたばかりか、御貸人を他藩に派遣することすら必要としなくなっていくのである。つまり、各藩の分立割拠は否定され、中央集権国家体制が目指されるのである。それに伴い、御貸人たちの能力の発揮場所は、諸藩から中央政府へと移っていったといえよう。

〔参考〕『海舟日記』『勝海舟全集』19）石橋絢彦「沼津兵学校沿革（六）」（『同方会誌』四十三）橋尾四郎「沼津兵学校と同附属小学校の鹿兒島・徳島への影響について」（『沼津史談』4）影山昇「日本近大教育の歩み」石川安次郎『沼間守一』早川省義「故小菅知淵君小伝」（『同方会報告』十四）桂園「山田昌邦氏懐旧談」（『同方会誌』19）

お知らせ欄

◎写真展「なつかしの沼津」を開催中

12月20日から4階展示室で写真展「なつかしの沼津」が始まりました。明治、大正、昭和にわたるなつかしい写真67点が展示され、市民に話題を呼んでいます。

資料は、かつて沼津市制50周年を記念して、市と沼津史談会の共催で昭和47年に開催された「目で見ると沼津の歴史」展の際、収集されたものの一部に加えて、今回広報誌や地方新聞を通じて呼びかけ、新たに収集された写真資料31点が追加されています。

主な資料としては、「沼津花柳界の風景」「空襲を受けた市街地」

「愛鷹婦人会の軍事訓練」などを



沼津町大火

はじめ、新しい資料として大正時代の沼津の町並みの組絵はがきや大正2年の沼津町大火の現場写真などが展示されています。

展示会は2月27日まで開催しています。是非一度ご来館下さい。

◎定期購読のおすすめ

「明治史料館通信」は年4回発行し、館玄関をはじめ市各施設等で無料配付いたしますが、継続してお読みになりたい方には、郵送料のみのご負担で、発送いたしております。ご希望の方は、住所、氏名、郵便番号をはっきりお書きの上、2年間分の郵送料として、六〇円切手8枚を同封して当館あて封書でお申込み下さい。

なお、創刊号からのバックナンバーを入手されたい方は若干の残部がありますので、その旨を書き添えて右の切手のほか更に一一〇円分の切手を追加して下さい。

沼津市明治史料館通信 第8号

編集 沼津市明治史料館
発行

〒410 沼津市西熊堂372-1

☎〇五五九(23)三三三五